# 蝶は星を駆け僕らを繋ぐ

ゆっくりシップ

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
どんな関係って聞かれたら。
「大切な人……　かな」
「友達以上……　かな」「……　それも少し違うか」
僕達の繋がりにはきっとーー絆って言葉が相応しい。
筈だった、多分……

# 目　次

催涙雨病む頃 ―――――――― 1
この惑星でただ一つだけの片隅の物語 6
それでもエメラルドは砕けない ― 12

# 催涙雨病む頃

「えへへ……これで私だけを見てくれるね」

少女が微笑む。

薄暗くじめっぽい部屋とは裏腹に僕を固く抱き締める彼女から香る匂いはお日様の様だ。

本来こんな美少女に抱擁されているなんて羨ましいと言われそうだけれど悲しい事に、瞳に光はなく僕の手首には金属の冷たい感触を感じる。その時点であまり喜べない状況だという事が読者の貴兄らにも分かるだろう。

えーつまり簡潔に現在の状況を纏めるとだね、

監禁されちゃったぜ☆テヘペロ☆

……現実逃避はここまでにしておこう。

目の前の銀髪を見つめながら少しずつ物事を整理、思い出していく。

自分の名前は『華泉皐月』。

数年前共学になった花咲川学園中等部の3年生。

好きなものは糠漬け、嫌いなものはピーマン。

次に覚えているところまで遡ってみる。
まず僕は昨日、最近大人気のガールズバンド、ポピパことＰｏｐｐｉｎ’ｐａｒｔｙのライブがバイト先のＣｉＲＣＬＥであったからそれの準備を手伝った。
ライブは無事大成功。
そのあと香澄先輩に告白されて……
うん？
香澄先輩に告白……？

「うわぁぁぁ!!」
「っ!?ど、どうしたの?!痛かった!?」

違う、いや違わないけど違うんだよ。
僕は今嬉しさとか恥ずかしさとかで頭がいっぱいになっているんだ。監禁されてるけど。監禁されてるけど……！
ふぅ……　話を戻そう。
こ、告白されて頭がさっきみたいにパンクしかけていた僕がなにか返そうとしたらそこには既に香澄先輩はいなかった。

どうやらあちらも羞恥心でいっぱいになって逃げるように有咲先輩達の方へ駆けて行ってしまったらしい。
あんな年中花火大会みたいに賑やかで明るい先輩でも恥ずかしがるんだなぁと自分の事を棚にあげ考えていると後ろからいきなりハンカチのような物を顔に押し付けられて目が覚めたらここだった。
うん、立派な誘拐だね。
肝心のその犯人だが……

「ごめんね痛かったよね……　はぁ、私やっぱダメだなぁ……」

僕の胸板に顔を押し付け半泣きになっていた。
『倉田ましろ』。少なくとも僕にとっての一番の理解者にして親友。
そして今回の誘拐犯。

「だ、大丈夫だよ僕は。それよりなんでこんな事したの？」
「だって……　だって皐月君が私から逃げたから！皐月君がいてくれたから私頑張ってこれたのに……　！」

「……　っ！」

逃げた。

確かに間違ってはいない。

僕はましろちゃんを拒絶し自ら遠ざかったのだ。

彼女はモルフォニカという彼女自身の居場所を見つけた。

なら僕は彼女にはもう必要ない、そう考えｌファンとして応援し続けていくと決めたのだ。

「私にとって皐月君が全てだったんだよ？今はつくしちゃん達もいるけれどそれでも君がとっても大事な存在だって事は変わらないよ。なのに……　よりにもよって香澄さん達の方へ行っちゃうなんて……　！」

あぁ、どうしてこうも僕は選択を間違えてしまうのだろう。

外しか見ないで本当に大事な事をいつも見落とす。

薄暗い部屋を鉄格子ごしの窓から射す月光がうっすらと照らす。

光が空気中の埃をくっきりと照らし出し、その埃達はまるでちょうちょのように空を

舞う。

その光景を彼女の肩越しにぼんやりと見つめながらましろちゃんと初めて出会った時を僕は思い出していた。

あぁ、あの時もちょうどこんな青白い月の夜だったなぁと。

# この惑星でただ一つだけの片隅の物語

「産まれなければよかったのに」

あの日、公園でそっと呟いた言葉は夜空に舞い上げられて澄みきった蒼に飲み込まれて消えた。

誰からも必要とされず存在しているだけで忌み嫌われる。

そんな生になんの価値があるのだろうかとさえ思っていた。

だからベンチで俯いて泣き声を必死に堪えながら震えている彼女と偶然出会った時あんな事を初対面にも関わらず言ってしまったのだろう。

少しでも誰かに必要とされたかったから。

生きていていいよ、と言われたかったから。

「話……　聞こうか？」

彼女ーー倉田ましろはこんな端から見たら即通報案件な不審者の僕を見て言った。

「……　きらきらしてる。……　す、すいません急に！」

あの頃はなに言ってるんだこの人とブーメランを投げてしまったが彼女の見ている

世界を理解し始めた今なら……　やっぱりよくわからない。
僕にキラキラしてる要素なんてこれっぽちもないのに。
ガコンッと低い音が冷えた風に流され消えた。
自販機からペットボトルのミルクティーと缶コーヒーを取り出す。
あれから僕は彼女の話を聞いていた。

「テストの点数が低くて落ち込んでいた、と」
「はい……　このままじゃ志望校には行けないぞって先生に言われてそうしたらなんだか段々周りが私の事を道端の鴉みたいに見てるんじゃないかって思っちゃって……」
「それでこんな時間まで公園に？」

彼女が力無く頷く。
僕はこの悩みに対する正答を持ち合わせていなかった。
綺麗事を並べた程度の戯れ言は根本的な解決にはならない。
それは一時的に傷を癒すだけだ。
本当なら適当に受け答えすればいいのにこの時の僕はなんでだかこの悩み、想いに

ちゃんと向き合ってしまったのだ。
まるで翔べなくなった白鳥に手を差し伸べるかのように。
……　そこ、いい例え見つからなかったんだとか思わない。

「凄く……　難しいね」
「はい……　ってうん？」
「どうかしたの？」
「いや、こういうのって『周りは気にするな』ーとか言われるものだと思ってたから……」

本来そんな当たり障りない言葉が一番なんだろう。

「僕は貴方の事を全く知らないしね。それにこういう問題は誰かが解決するものじゃない、自分自身で変えていかなくちゃいけないから」
「やっぱりそうですよね……」
「でも」

彼女の目を見て続ける。

「胸に溜まった膿を吐き出すくらいなら手伝うよ」

「！」

僕の貧弱なボキャブラリーで必死に絞り出した答え。

１人で抱え続けて重さで沼に引きずり込まれる苦しみを知るのは僕だけで十分だし彼女にそんな思いをさせたくないと初対面なのに思ってしまったのだ。

心の暗闇を塗り替えられるのは人と人の絆だから。

「あ、ごめんね初対面なのにこんな偉そうな事言って……　こうやって人と話すのが久しぶりだからつい……」

謎の賢者タイムに入って自分の発言を後悔し始めた。

やばいやばいやらかしたふつうにおわたおわたってなんだよおわっただよ（目ぐるぐる）

必死に早口で弁解するが頭の中も真っ白になって脳裏を過去の記憶が過る。

「ふふっ……」

回想シーンから更に回想になる直前で声が聴こえなんとか立て直す。
回想なんぞのオンパレードはメタ的にだめぜったい。
「あ、あのー？」
「ごめんね、なんかこんな風に言われたの初めてで」
先程と打って変わって口調も少し砕け表情も柔らかい。
この時、僕は彼女の瞳にキラキラ耀く星を視た。
幻視だろＪＫとか思った読者諸君らは後でお説教なので覚悟しておいてほしい。
「それじゃあその……　また聞いてもらいに来てもいいかな？」
「……　うん、喜んで」
お互い微笑みあう二人の頭上を祝うように煌めきが駆けていった。
っとまぁこんな感じで僕、華泉皐月とましろちゃんは出会った訳なんだけど……
なんか状況が状況なだけに頭がまだ回ってなくて朧気なところがあるのは許してほしい。
だって今リアタイの方で絶賛監禁中なんだもん。
密着してるんだもん。

いろんなところ当たったり艶っぽい声だったりが耳元で聴こえてくるんだもん。
あ、まだ回想編は続くよ、だめぜったいと言ったなあれは嘘だ。

# それでもエメラルドは砕けない

歯を磨く音が嫌いだった。

別に歯を磨く事自体が嫌いな訳ではない。

ただ朝と夜、1日の始まりと終わりを否応にも実感させられる音だったからだ。

たまたま生まれ持ってきてしまった周りとは違う髪色。アルビノとメッシュを入れた訳でもないのに水色に染まった左前髪。

そうたったそれだけの事だけで家族から身内である事を否定され学校で虐められていた僕にとって朝はこの日々が夢ではない事を切実に思い知らされ夜は明日には皆普通に接してくれるのではないかというほんの少しの期待とどうせいつものように裏切られるであろうって諦め。

所詮人というモノは他人を下に見て自分の方が上だと思わなければ生きていけない生き物なのである。

こんな状況に置かれはや10年近くの時が過ぎた今でも僕が生きてこれた理由、それは親戚の存在が大きいのだろう。

市ヶ谷有咲、僕の再従姉妹。そして数少ない僕を拒絶しなかった親族。

彼女がいなかったら僕は間違いなく生を投げ出し、『彼女』と出会う事もなかっただろう。

彼女から転校の誘いを受けたのは去年。つまり中学2年生の秋、彼女が高校1年生の時だった。

曰く彼女の通っている中高一貫の学校が一昨年、少子高齢化に伴い共学化したのでこちらに転校してきてはどうか、という事らしい。

「高等部と中等部だから多少は距離はあるが少なくともなんかあったらすぐ助けに行ける距離だからな。まぁ皐月が行きたいならって話だが……」

言い終わった時には僕は既に決めていた。

傷ついた身体全身が叫んでいた。

「このままじゃ前に進めない！未来への道を探すことすら出来ない！」

そして選んだ。

未来を、自分を変える最後のチャンスに乗る『覚悟』を。

ここまでが僕自身の過去。

結果的に僕は転校した先、花咲川学園で変われたかと言われると素直に首を縦には振れないが『マイナス』から『ゼロ』へは進めたと思っている。

人間というのは醜悪な生き物だとこの十数年で知った。だがそれと同時に最も美しい心、『他人を想う精神』を持つのもまた人間だということも知った。故に僕は人を嫌い、そして人の善意を信じたいと強く思ったのだ。

……　えっ？なんで1話の冒頭みたいな事になったって？

それには海よりも深くこの湿っぽい天井よりも低い事情があるんだけれど……

「ふへっうへへへ……　いいにおい……」

「ま、ましろちゃん？首絞まってるから少し緩めてくれると嬉しいかなぁって」「やだッ！」「うんだよねー」

こちらとしても女の子の柔らかい身体が嫌ってほど堪能させられて役得というか詰みというか。

落ち着くんだ僕の僕。シリアスっぽい回想が終わったからって張り切るな。

肝心のましろちゃんは若干幼児退行…？いや、普段からこんなんか。

先ほどからずっとその触れたら崩れてしまいそうな細い腕を僕の首に回し髪やら色々な所をくんかくんかと嗅いでいる。

「これじゃあまるで赤ちゃんだな……」

▪

ため息で消された声は部屋に響く前に完全に消失し代わりに彼女の鼻息だけが耳に届く。

こんな状況がいつまで続くかも分からず先ほどのように消えないようにしっかりと声を出す。

「『やれやれ…』ってね」

1度くらい言ってみたい言葉ではあったけどこんな状況で使う羽目になるとは多分李白さんでも見透せなかっただろう。